第一回留学報告書

明石晃一

1.　はじめに

八月、英国入国後の十日間の隔離を終えてからこの報告書を書くに至る十二月までの決して長いとは言えぬ期間に、今までの人生の数年分と同等量の出来事が目まぐるしい速さで起こり、とてもそれらは纏まった構想を以て記述できるものではないとただ今呆然としているところです。日本語の文章を書かずして久しい故、以下大変稚拙な報告書となるでしょうが、何卒ご容赦ください。

２．暮らし

初めの数月、そして今も尚、セントアンドリュースという街のあまりの美しさに未だ息を呑むばかりです。これまでヨーロッパのいくつかの街を歩いてきたものの、これほどに神聖な空気に抱かれた世界を私は知りませんでした。中心部には数多のカトリック教会が見受けられ、時計の長針が十二を指せば街の至る所で鐘の音が鳴り響きます。特に日曜日の午前から正午にかけては、セントアンドリュース大学の中心であるセントサルヴァトールクアッドの聖堂にて礼拝が行われ、その中は学生たちの正装であるガウンの朱色で彩られます。礼拝が終われば学生たちは海側にある Pier に向かって歩き、そこを一周することで一連の儀式が終了します。十五世紀より続く歴史に育まれたこれらの伝統が、文字通りセントアンドリュースを聖なる場所にしているものなのだと受け取っています。

寮での生活は、高校二年時にアメリカで経験したものと大まかに言えば似たものであったと思います。割り当てられた部屋の周りには英国出身者を含めどこもかしこも異なる国籍の人間で溢れていて、彼らと生活をするというのは良くも悪くも新鮮です。「常識」と「常識」が衝突する場所でもあるので、このような生活には感覚の差異を超えて関係を築きあげる力が必要とされ、通常の環境にいては育たぬ部分が育っているとわかりやすく実感できる機会であるとも言えましょう。生活で多く会話を交わすのは主に英国出身の友人や、東欧地域出身の友人であることが多く、パブで談笑しながらも時に彼らから真剣に語られることは、自分の思考に新たな視座を与えてくれているような気がします。彼らの影響で英語はさらに上達しましたし、なんなら何故かロシア語の語彙も少しだけ増えました。後ウォッカを飲む回数が増えました。

食事について言えば、大まかに巷で謳われている通りとなります。あまり細かく言及するまでもないでしょう。入国後の隔離中に届けられた食事は、未だ果たして食用であったのかが判りかねます。しかし材料が決して悪いということはなく、地元のスーパーに売っているようなものでも、品質は良いと言えましょう。スコットランド産の鶏肉は非常に柔らかく、梨は特に新鮮で自分で適切な調理を施せば美食に飢えるというほどのこともあり

ません。また運の良いことに、寮から徒歩で二十分ほど離れた所に宅配の中国料理屋があり、日本で食べる中華料理のどれよりも美味であったと申し上げておきます。

食と住については前述の通りですが、簡単に衣についても記します。スコットランドという土地は、かつて極寒の地として知られておりましたが、温暖化の影響か今は冬のこの時期でも氷点を切ることは極めて稀です。夏は日本の秋ほどの気候、冬は同じ程度といった具合で非常に快適であり、年中似た格好をすることとなります。しかし実際のところは冬は多雨で、故に晴れた日は皆外に出て日の光を惜しむように楽しむのです。

今年度は授業の一部が録画であったこともあり、それらを早めに消化してしまえば残りの授業数を入れても空いた時間は多くあったと思われます。そのような時間は、晴れてさえいれば外に行って海の近くを歩いたり、大学所有の音楽堂の練習室にピアノを弾きに行ったり、ジムに行ったり、カフェで他の勉強をしたりなど生産的な毎日を送ることが出来ました。

3． 学び

今学期は、ファウンデーションの初学期ということ故に生物学、化学、及び医学倫理の一般的な内容から入る形になりました。前者二つについて言えば、医学とは直接的に関わりがやや薄い内容（進化学、植物学、物理化学、無機化学など）が主であった為、正直なところ自分の興味が強く唆られるということはありませんでしたので、必要量を必要な分だけ熟したという形になります。医学倫理については、非常に新鮮な内容であり、一般的に扱われる医学の領域における倫理学の型を学習しました。またそれを基にクラスで行われる議論は非常に活発なものであり、自身もその場で力を最大限発揮できるよう意欲的に授業内外で学習に取り組むことが出来たと思います。来学期については、生物学は人体生物学、化学は有機化学に変わるので、自分の興味に近い分野となることに鑑み、更に努力の量を増やして参りたいと考えています。また、学部の必要要件として UCAT (University Clinical Aptitude Test) というものを九月に受験しました。これは、英国の大学医学部全てで必要とされているもので、基準は大学によりますが、主に医師として必要な読解力、数値処理能力、画像処理能力を問われる試験で、ざっくりいってしまえば、IELTS の読解の試験と、SAT の数学と、よくあるIQテストの図形問題を融合させたようなものです。読解について言えば、制限時間に比して膨大なテキストの量が出題されるのですが、周りのネイティブの友人たちに聞いても解ききれないという人がほとんどでしたので、若し読者の方で受けられるということが御座いましたら、あまり気負わずに解ける分を解くというのが重要になるということだけ申しておきます。数学については日本人は比較的強いので、問題ありませんでした。最後ですが、これは頭を柔らかくして、且つ頻繁に取り扱われる数学的主題（素数列、パリティなど）や色の組み合わせなどを一般化し規則性を読み取るということをある程度量で以て訓練すれば解けるようになります。Oxford や Cambridge の学部試験では BMAT というものを代わりに扱うそうで、私も一度拝見しましたが、傾向はやはり非常に似ていて、英国の大学医学部というのは一般に医者にこういった能力を求めるのだと、中々日本では考えづらい現状に驚かされることがありました。試験は年一度しか実施されておらず、これを落とすと来年受けられはするものの合格基準点が上がって

しまうということで焦っておりましたが、渡英後大急ぎで一ヶ月間対策をし、合格することが出来ました。

一つ新鮮であったのは、これは英国の大学全般に言えることですが、チュートリアルというものが非常に充実していることです。これは大学で教鞭を執る博士の先生方などが、極めて少人数の生徒を集めてカリキュラムの内容に関する更なる深い、または必要に応じてバックアップを行うというもので、あくまで大学の提供する教育の一環としてなされている取り組みです。試験が近づけばそれまでの過去問をその先生方が持ってきて、理解を深める為に解法を実演するということをし、そうでない時は講義では詳細に触れられなかった些か突っ込んだ内容に言及し、生徒の理解を立体的にするという形で行われます。

残った時間のほとんどはアルゴリズムの学習に費やしました。Codeforces というロシアの競技プログラミングプラットフォームを知り、そこで提供される問題やコンテストの参加を基軸に、データ構造の深い理解やグラフ理論の簡単な応用問題 (?) の解法を身につけることが出来ました。言語は大まかには Python 3 時々 C++ を使用しているといった状態ですが、今後アルゴリズムの知識が十分に固まってきたら（とりあえずは Codeforces でいう青色から紫色くらいを目安）、機械学習の勉強に本格的に着手したい為、特に Python の扱い、及び計算量を意識したコーディングには十分に早い段階で慣れているという状態を実現したいと考えています。また、大学のソサイエティである St Andrews Computing Society というのに加入し、コンピューターサイエンスを専攻している同級生の友人を複数見つけることが出来ました。その中でも特にインド出身の友人は、現段階で自分とちょうど近い能力を有しており、お互い仲間としてライバルとして研鑽し合えるのではないかと期待しております。彼とは一度、十一月に行われた G-Research Coding Challenge という自然言語解析をテーマとしたコンテストに出場し、結果は五位と惜しいところで終わりましたが、二人とも成長への道筋を見つける為の良いきっかけになったと満足しておりました。来年度のコンテストでは新たに仲良くなったノルウェー出身の友人も織り交ぜて、更に精進して行きたいと思います。自分の将来の展望を考えた時、これらのスキルは必須となってくるので、本業の医学とバランスよくレベルアップしていけたらと思います。

4. 景色

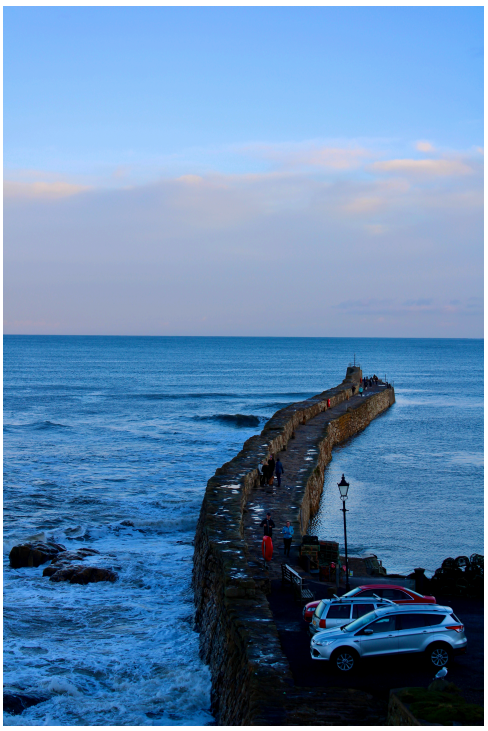
(1) Bute Medical Building

(2) St Salvator's Quad

(3) Lane to the West Sands

(4) Hepburn Gardens

(5) Pier



(6) Market Street

(7) Sunday Chapel Service